

# 國學院大學学術情報リポジトリ「K-RAIN」

戦国時代の紀伊地域における傭兵活動に関する研究：  
雑賀衆傭兵団を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學大学院文学研究科 公開日: 2023-02-07 キーワード: 作成者: 丁, 諾舟 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00001569">https://doi.org/10.57529/00001569</a>

# 戦国時代の紀伊地域における傭兵活動に関する研究

## —雑賀衆傭兵団を中心に—

A research on the Kii-area's Mercenary at the Sengoku Period

丁 諾 舟

キーワード：雑賀衆 傭兵 紀伊地域 戦国時代 傭兵団

关键词：杂贺众 雇佣兵 纪伊地区 战国时期 雇佣兵团

### 要旨

傭兵は一種の独特な戦力として歴史に存在し続けた。雑賀衆は中世日本に活躍していた典型的な傭兵団である。雑賀衆傭兵は二重の特殊性を持つ。傭兵としての特徴を持つので、普通の兵士とは一線を画したと同時に、内部構成などの要素に、ほかの傭兵と明らかな差異が見られる。雑賀衆傭兵の研究を通じて、傭兵とほかの兵士の差異を掴めるだけでなく、異なる政治環境、地域風俗の下で生まれた傭兵集団の差異も垣間見ることができる。本研究を通して、中世日本の戦争事情をよりあきらかにでき、鎌倉時代から定着した武士のイメージを再認識することができると共に、戦国時代に関するさらなる知識が得られると考える。

### 摘要

“雇佣兵”作为一种独特的士兵来源贯穿了世界历史的各个时期，杂贺众雇佣兵就是中世日本的一支典型雇佣兵势力。杂贺众雇佣兵具有双重特殊性，其身上不仅具备着特殊兵源——雇佣兵所共有的一般特征，而且在内部组织结构等方面具有不同于其他雇佣兵的独特个性。通过对杂贺众雇佣兵进行研究，一方面可以发现雇佣兵与其它非雇佣兵之间的差异，另一方面能够探知不同政治结构，地域特征下的雇佣兵集团间的差异。这可以丰富我们对中世日本的战争状况，特别是武士阶级的认识，加深对战国时代社会结构的理解。

## 序説 雑賀衆とは

雑賀衆の傭兵は日本の中世末期から近世において、もっとも個性的な傭兵団とも言える。日本に留まらず、世界史の視点から見てもかなり独特な傭兵団である。

雑賀衆の傭兵は二重の特殊性を持つ。まず、雑賀衆はほかの兵士と区別するための傭兵的な特徴を持つ。そして、傭兵の中でも、雑賀衆は独特な政治、経済状

況によって育てられた独特な個性を持つ。したがって、雑賀衆に対する研究を進めることで、傭兵の共通性をつかむことができるばかりではなく、紀伊地域の風土に育てられた雑賀衆の個性をも垣間見ることができる。

雑賀は紀伊国北西部（現在の和歌山市及び海南市の一部）の「雑賀荘」「十ヶ郷」「中郷（中川郷）」「南郷（三上郷）」「宮郷（社家郷）」という五つの地域（五組・五搦などという）から成り立っている。すなわち、雑賀衆とは、この五つの地域の地縁関係により結びついた集団である<sup>(1)</sup>。史料に見られる「惣国」と同じものだと考えられているため、「紀州惣国」もしくは「雑賀惣国」とも呼ばれている<sup>(2)</sup>。

雑賀衆傭兵はこの地域を拠点とする傭兵の連合である。15、16世紀はかれらの主要な活躍期間である。雑賀衆傭兵は数千丁の鉄砲を保有したと言われ<sup>(3)</sup>、きわめて高い戦闘力を持つ陸上傭兵集団でありながら、次第に海上警護、海運や貿易にも手を伸ばした。

本論のいう雑賀衆は五組地域に住むすべての者を指すわけではなく、単に雑賀傭兵衆の一員として傭兵稼業に関与した者だけに焦点を絞って考察を進める<sup>(4)</sup>。

## 1. 雑賀衆の構成

「湯河直春起請文」<sup>(5)</sup>という文書は雑賀衆研究において極めて重要な史料である。この起請文は一種の契約文書であり、雑賀衆の構成、指揮システムを示したものである。雑賀衆を構成するメインパーツを明記した上に、各パートのリーダーの名前と花押も残されている。名高い傭兵隊長雑賀孫市（十郷 鈴木孫一）の名前が初めて史料に出現したのはこの起請文である<sup>(6)</sup>。

起請文の相手湯河直春は紀州の地元大名であり、その父である湯河直光はかつて雑賀衆と根来衆を雇って三好兄弟の勢力を打ち破ったことがある。この起請文は直春がその父に代わって家督についた後、引き続き雑賀衆と良好関係（雇用関

(1) 鈴木貞哉『戦国鉄砲・傭兵隊』11 - 23頁

(2) 武内善信「天正三年雑賀年寄衆関係史料」『本願寺史料研究所報』27号、2002年11月30日

(3) 鈴木貞哉『戦国鉄砲・傭兵隊』51 - 53頁

(4) 和歌山県神職取締所が発行した「紀伊続風土記」の記載によると、1575年に大河内のある者が雑賀孫市について戦争に参加したという記載がある。したがって、雑賀衆傭兵隊長のもとに働く人は雑賀の人間に限られていたわけではないといえる。

(5) 東京湯河家文書『和歌山市史』第四巻、和歌山市、1977年、戦国231号（一五六二）

(6) 鈴木貞哉『戦国鉄砲・傭兵隊』167頁

係までには及ばない)を維持したいという旨を伝える文書である<sup>(7)</sup>。

この史料から様々な情報を見出すことができる。まずは地縁関係、つまり雑賀衆を構成する地域および各地域の上下関係が見られる。野上を除けば雑賀衆を構成するもっとも重要な五組がここに列記され、なかんずく雑賀荘の中の三つの主要部分である本郷と岡、湊は一番上に載せられ、地域における優越性が示されている。各地域のリーダーのサインと花押は地域名の下に記されている。

次に見られるのは組織関係である。この起請文から、雑賀衆において総隊長的な人物は存在しないことが読み取れる。地域間の優劣こそあるが、一括的に雑賀衆傭兵を統率し、すべての傭兵を代表し、一人で雇い主と契約を交わすことができるリーダーは存在しない。ゆえに、起請文は各地域のリーダーの「列名」という形を取って、各リーダーは自分の手下だけを代理とすることができる<sup>(8)</sup>。したがって、一口に雑賀衆といっても、雑賀衆の実態は結束力のある一つの傭兵団ではなく、地縁関係をもつ多数の独立する傭兵団の連合体である。ルイス・フロイスによれば、各傭兵団は合議制に相似する手段で自治を行い、その合議制の上部に年寄衆をおき、各地域のリーダーと共に地域間の調和と協力を計り、雑賀衆の傭兵活動を同調させようとしていた<sup>(9)</sup>。「湯河直春起請文」においても、この点が看取できる。この「御請」に同意するリーダーはばらばらに各自の文書を持ち込むのではなく、同じ文書にサインをしておき、一定の同調が見られる。しかし、各傭兵団は共同体の行動を無視し、自分勝手な行動を起こすことも可能である。雑賀一向衆という横断的な組織と絡むことで、総体を無視する遠心力は一層強まった。「准如様御代替之節紀州御末寺御請書」<sup>(10)</sup>に、ほぼすべての雑賀衆のリーダーがサインをしているが、真光寺末派の重要人物である島本左衛門大夫のサインがなく、真光寺末派のほかの人物もほぼサインをしていない。おそらく、石山合戦の戦略について、島本左衛門大夫は講和に反対し、共同活動(御請)を拒絶しただけではなく、一向衆の力を用いて、真光寺末派に所属するほかの傭兵隊長に影響力をもたらし、共同活動に同調しないように仕組んだ。このことから、各地域のリーダー(隊長)はかなりの自主性を保有しており、合議制により雇い主

(7) 同上書80-85頁

(8) 武内善信「雑賀一向衆列名史料について」『本願寺史料研究所報』25号2000年7月5日

(9) 鈴木真哉『戦国鉄砲・傭兵隊』87頁

(10) 武内善信「天正三年雑賀年寄衆関係史料」『本願寺史料研究所報』27号、2002年11月30日

を決め、必要な時だけ同業者と手を組み、共同活動をとったと考えられる。

## 2. 雑賀衆傭兵の発展条件

雑賀衆傭兵の活躍時期は15～16世紀である。なかんずく1570～1580年の石山合戦はその最盛期である。雑賀衆傭兵団はなぜこの時期に繁栄を誇ったのだろうか。

外部から見れば、まず、この時期は戦国時代の直中であり、封建割拠、領土争奪のピーク期でもある。全国的な中央権力機関は一応存在するが、国家を統治する能力はない<sup>(11)</sup>。言い換えれば、この時期の日本の国内情勢はまさに今の国際社会における「無政府状態」とよく似ている。無政府状態において、傭兵稼業を禁止するあるいは「推奨しない」とする強制力は存在しなかった。これが傭兵稼業の政治的基礎となった。それだけではなく、「無政府状態」のもっとも直接的な表徴は大小さまざまな割拠勢力が全日本に散在し、地域統制権、領土、資源をめぐる、果てしない争覇戦を繰り返すことである。1570年に近畿地域に勃発した大きな争いだけを数えても、10件以上に上る。傭兵にとって、武器の買い替えや兵員の徴集など、すべて金を要する。戦争は傭兵稼業のもっとも主要な資金源であり、16世紀の絶えない戦争は傭兵団を持続的に拡大させる経済的好機となった。ゆえに、15～16世紀に発生した頻繁な戦争は雑賀衆を育成する肥沃な土壌である。1467～1477年の両畠山の争いにおいて、雑賀衆のライバルである根来衆の勢力は成熟期に入り、この紛争において大変活躍した<sup>(12)</sup>。この時期の雑賀衆はまだまともな傭兵団になっておらず、少数かつ無組織的な雑賀衆傭兵しかこの紛争に参加しておらず、史料の記載もかなり曖昧である<sup>(13)</sup>。しかし、応仁の乱を経て1535年に入ると、雑賀衆はすでに300人規模の鉄砲別働隊を出せる一大勢力となった<sup>(14)</sup>。石山合戦において雑賀衆は本願寺側の絶対的な主力である。雑賀衆はごくわずかな時間を使って目覚ましいほど大きな成長をなし遂げた。ルイス・フロイスの記載によれば、「かれら(雑賀衆)は戦場の武勇によって、

---

(11) 谷下一夢(1935)「石山合戦と紀伊雑賀勢」『歴史地理』第六七号ノ二

(12) 鈴木真哉『戦国鉄砲・傭兵隊』20-27頁

(13) 同上書30頁

(14) 改訂橿原市史編纂委員会編(1986)「私心記」『橿原市史』Vol.史料 2 578-579頁

日本に名を馳せた」<sup>(15)</sup>。近畿地域における豊富な戦争機会がなければ、雑賀衆はこれほど早く成長できるわけがない。したがって、頻繁な戦争は傭兵に豊富な市場を与え、傭兵にとっての重要な成長条件であるといえる。

つぎに、戦死がもたらす絶対的な兵員不足とは別に、この時期の日本において、制度内兵士（武士）は相対的な不足を呈し、ほかの兵員によって兵隊の空白を埋めなければならない状態に陥った。実は「この時期の日本」という表現は省いてもよいのである。いつ、どこ、何の国、何の体制においても、戦争が存在するかぎり、兵員はいつも不足している。勝利への渴望は相対的な兵員不足を引き起こす原因である。紛争各方は自分の戦闘力をなるべく増強し、勝利の確率をあげたい。この渴望には到達点が存在しない。兵員の相対的不足はこの果てしない渴望の結果である。加えて、兵士と一般労働者とはまったく違う存在である。労働者が創出する商品は平穩かつ持続的な市場をほしがり、市場に大きな変動が起こるのを好まない。「戦争市場」はその正反対である。戦争において乾坤一擲的な瞬発力が一番大事であり、短期間にできるだけ多くの戦力を敵に打ち放ち、勝利を勝ち取ることが一番肝心である。勝利したら、兵士への需要も兵士市場も瞬時に消え去って行く。この特性ゆえに、戦闘の前から自分が十分な戦力を保有していると確信できる国あるいは勢力はどこにも存在しない。戦国時代の日本大名も当然例外ではなかった。加えて知行制を基礎とした中世武士制度によって確保できる兵員は極めて有限であり高価である<sup>(16)</sup>。しかも、武士の戦死は社会の仕組み（転封）にも深刻なダメージを与え、ひいては封建社会の支柱である農業生産にも影響する。兵員不足状態を打開するため、室町幕府時代からすでに武士ではなく一定の傭兵成分を有する「足軽」を雇って戦争に投入した<sup>(17)</sup>。戦国時代に入って戦争規模はどんどん大きくなってゆき、兵員の需要も莫大な数まで達していた。同時に戦争に伴う人員の消耗も激しくなり、地元の兵員を使い尽くしたら、ほかの地域の傭兵を雇うのもやむをえない手段である。近畿地域、特に京阪地域の知行地を見てみると、公家などの知行地が散在し、兵士を提供できる名主はもともと比較的少ない。長い戦争頻発時代を経験した後に、周辺の紀伊地域から兵を募集するのもやむを得ない。一言で言えば、戦死による絶対的兵員不足と勝利への

---

(15) 松田毅一、川崎桃太訳『完訳フルイス日本史』179頁

(16) 今谷明「戦国の世」『日本の歴史』198頁

(17) 高橋典幸、山田邦明、著保谷徹、一ノ瀬俊也『日本軍事史』131-150頁

渴望による相対的兵員不足は傭兵が繁栄できる前提である。

そして、戦国時代において、多数の地域における農業生産能力は大幅に上昇した<sup>(18)</sup>。傭兵の参戦動機は金銭と実物(食糧を含め)を獲得することで、雇い主は十分な金銭と実物を持たないと傭兵を雇うことは不可能である。封建社会において、雇い主の財力を決定するのは農業生産力である。生産力の上昇は雇い主の雇用能力を介して傭兵稼業にカツを入れた。農民にとって、生産力の上昇は租税と自家用の食糧以外にも、市場に売り飛ばせる余剰した食糧をもつことを意味する<sup>(19)</sup>。戦国時代において、商品化の進行と同時に、社会的分業もかつてない深度まで到達した。特に近畿地域において、社会的分業はかなり発達している<sup>(20)</sup>。社会的分業の深度も傭兵の活躍に大きく影響する。そもそも傭兵は職業の一種類である。戦うことに専念する代わりに、生活に関することはほかの職業(服、鍛冶など)に従事する人に面倒を見てもらわなければならない。ほかの職業があるゆえに傭兵という職業が存在しうる。したがって、15世紀以来の農業発展、金納地租、商業発達そして社会的分業の深化は雑賀衆傭兵が発展する経済条件である。

最後に世論の認可、すくなくとも否定しない態度は傭兵業の発展を促す思想基礎である。ジュネーヴ条約の示したように、傭兵活動を敵視する見方は根強く存在する。マキャヴェッリはその代表格である。戦国時代の日本においても、傭兵を芳しく思わない人はたくさんいた。『三河物語』が記す徳川家の家臣大久保彦左衛門の言論はその典型である。かれは傭兵は頼りにならず、譜代だけが頼れるという旨を述べた<sup>(21)</sup>。これは大久保本人の言論かどうかはともかくとして、このような思想は『三河物語』が編成された時代に存在したことはほぼ疑えない。すくなくともこれは作者の心曲、あるいは作者が聞いた話である。しかし、鈴木真哉が述べるように、16世紀の日本において、傭兵が戦場において怠けず、作戦を全うするかぎり、統治者も一般の百姓も傭兵に対して反感と偏見を抱くことはなかった<sup>(22)</sup>。ルイス・フロイスによると、雑賀衆傭兵は強い戦闘能力によって、大

---

(18) 木村茂光編(2010)『日本農業史IV中世』(吉川弘文館) 300-332頁

(19) 同上書320-322頁

(20) 同上書326-330頁

(21) 大久保彦左衛門(著) 小林賢章(翻訳)(2004)『三河物語 原本現代訳』ニュートンプレス 231頁

(22) 鈴木真哉『戦国鉄砲・傭兵隊』89-90頁

名の中にも盛名を馳せたので<sup>(23)</sup>、少なくとも反感を買っていなかった。おそらく雑賀衆もドイツ地方のヘッセン傭兵と同じように領主達が籠絡していたのである。世論が傭兵業発展に与えた影響は目に見えにくいだが、完全に無視することもできない。

内部から見れば、まず、紀州の雑賀地域の土壌状況は全般的に肥沃ではなく、しかも良質の土壌はほぼ宮郷、南郷に集中し、雑賀荘、十郷の土地はかなりやせていて、大規模穀物生産に向いてない<sup>(24)</sup>。土地をめぐる、雑賀地域内部においても争いはしきりに起こった<sup>(25)</sup>。貧しい土地のせいもあったが、雑賀地域の農業生産力は近畿のほかの地域より低く、食料の産出量も相当低かった<sup>(26)</sup>。この状況は雑賀地域の相対的人口過剰を引き起こした。古典期後期のアテネにおいてもまさに同じ状況であった。アテネの過剰人口は海外植民活動によって一時的に解消できるにもかかわらず、クセノフォンのような傭兵は輩出していた。アテネが持っていったような海外植民地を獲得できない雑賀の住人は出稼ぎに出ることを余儀なくされた。しかし、中世の日本において、社会も経済も閉鎖的で、近代化以後のように自由労働者が色々な就職口を探することができるご時世ではなかった。ほかの地域で小作人になることは法令で禁止され、町に入ろうとしても「座」などのギルドに仕切られた職業に従事するのは簡単なことではなかった<sup>(27)</sup>。傭兵活動はごく限られた出稼ぎの道の一つであった。

つぎに、雑賀地域の独特な自治伝統は大規模な傭兵活動を可能にする要因である。ほかの地域と同じく、雑賀地域にも大名が存在し、国侍などの統治階級が存在した。しかし、ほかの地域と比べて、雑賀地域の管理層の権限は相対的に低い。「湯河直春起請文」が示したように、雑賀地域は合議制に基づく自治体制によって治められ、この体制こそがルイス・フロイスに「農民共和国」<sup>(28)</sup>という印象を与えたものである。雑賀地域の内部の各部分（五組）の独立性もかなり強く、

(23) 松田毅一、川崎桃太『完訳フルイス日本史III』29頁

(24) 鈴木真哉『戦国鉄砲・傭兵隊』8-9頁

(25) 「佐武伊賀働書」、参照武内雅人(2011)「史料解題の改訂および補遺紀州経済史文化史研究所紀要」『紀州経済史文化史研究所紀要』第32号。注意すべき点は雑賀衆の最初の傭兵活動は隣の村と協力して土地を奪うことであった。

(26) 鈴木真哉『戦国鉄砲・傭兵隊』8-12頁

(27) 任鴻章『東アジアのなかの日本歴史〈4〉近世日本と日中貿易』231-6頁

(28) 松田毅一、川崎桃太『完訳フルイス日本史』132頁

地縁的連結の強い大名（例えば日高地域の湯河家）と親睦関係を維持する必要があるが、中世のヨーロッパのような分封システムに入って、ある大名から知行を受け、軍事義務を背負うことはなかった。この特性は二つの方向から雑賀衆傭兵の活躍を促進した。一方、雑賀衆傭兵のなかで、独立した作戦行動を展開できるユニットの規模は小さく、決議機関も小さい。極端的な状況において、十数人の傭兵衆だけでも契約の承諾を決定できる<sup>(29)</sup>。雇い主のオーダーへの対応は大きな傭兵団よりすばやく、適応性、応激性と活力に富んでいた。佐武伊賀守の活動はよい例である。彼は幾度も自主的に契約を取って戦いに参加した<sup>(30)</sup>。一方で、雑賀衆の独立的な政治地位のおかげで、雇用契約を検討する際に、傭兵隊長はただ報酬の多寡、人的損害の予算、戦争結果が雑賀衆の傭兵稼業に与える影響などの技術的な問題だけを念頭におくことができ、雇い主は自分の領主の友か敵か、領主の盟友の友か敵か、雇用契約の実行が領主の利益を影響するかどうかなどの問題を考えなくても済んだ。石山合戦において、この特徴は際立つ。これによって、雑賀衆の潜在の雇い主の範囲は大きく広がった。逆に雇い主にとって、領主を持っておらず、しかも明確な政治傾向のない傭兵はより一層信頼できる。なぜかというと、自分が出した作戦命令が傭兵の信条に背くあるいは忠誠を寄せる相手を傷つけるがゆえに傭兵の反乱を引き起こすという恐れはない。しかし、先行研究に指摘されるように、雑賀衆は政治的立場を持たないわけではない。傭兵活動において、彼らは利益を考えると同時に自治体の独立性を維持し、ある勢力に飲み込まれることを避ける。鈴木真哉は雑賀衆が「いつも天道に逆らって、天下人に喧嘩を売る」と述べたが<sup>(31)</sup>、その目的は、日本における統一政権の誕生を阻止するためである。筆者から見れば、雑賀衆のこの反統一的な立場は決して独特な要素ではなく、むしろ傭兵組織の全般に通じる「強い統一政権を忌み嫌い、集権がもたらす地域平和と衝突減少を怖がる」という共通性に属するものであるといえる。

そして、雑賀衆傭兵の本拠地である紀州地域の立地条件は傭兵稼業にとって極めて有利である。戦国時期において、各地で絶えない紛争が続いたとはいえ、近

(29) 谷下一夢(1935)「石山合戦と紀伊雑賀勢」『歴史地理』第六七号ノ二

(30) 「佐武伊賀働書」、参照自武内雅人(2011)「史料解題の改訂および補遺紀州経済史文化史研究所紀要」『紀州経済史文化史研究所紀要』第32号

(31) 鈴木真哉(2004)『戦国鉄砲・傭兵隊』211-215頁

畿地域における紛争の頻度と規模はあらゆる地域を超えた<sup>(32)</sup>。紀州は近畿の近辺において、戦争頻発地の中心ではないが、それほど離れてもいない。この立地条件は雑賀衆傭兵に新たな二重アドバンテージを与えた。一つは、紛争中心地と一定の距離を保つことによって、本拠地に戦争の飛び火を蒙ることを回避できる。豊臣秀吉の紀州攻めと雑賀内乱を除き、雑賀衆が本拠地が大戦の主戦場になったことはない。この相対的な平和によって、雑賀地域の生産、生活施設は破壊されることなく、いつも雑賀衆をバックアップできる平穏な本拠地でいられた。もう一つは、紛争中心地との距離がそれほど遠くないことによって、雑賀衆は契約を結んだあとに、ほかの傭兵よりも一足早く戦場に到達できた。当時の農業生産力と交通条件からみれば、兵士の遠隔地における作戦能力（遠征能力）と持久戦能力はごく限られていた。雑賀衆の活動範囲を観察すればすぐわかるように、水軍の力を借りても、雑賀衆が到達できるレッドラインは長宗我部が統べる四国地域と毛利が治める中国である。ごく限られた活動範囲といわざるをえないが、この時期の戦争頻発地域はほぼこの範囲に含まれた。雑賀衆傭兵はこの限られた地域の中で十分な参戦機会が得られた。このような意味で、雑賀衆の本拠地の立地は雑賀衆に豊富な市場を与えた。このアドバンテージは雑賀衆傭兵がまだ弱い形成期の、特に武器が乏しく、訓練が不十分で、兵糧が足りない時期において、最も重要性を示した。

最後に、雑賀地域の雑賀荘、十郷は海の近辺に位置し、加えて世界に向ける扉であった「堺」と密接な関係を持ち、南蛮の新しい物と接する機会が多かった<sup>(33)</sup>。南蛮の舶来品は後ほど雑賀衆の高い戦闘力をかげひなたなく支えた。なかんずく、一番重要なのは鉄砲である。このポルトガルからの舶来品は後ほど雑賀衆、根来衆のトレードマークとなって、雑賀衆傭兵の専門化と戦闘力の向上に多に寄与した<sup>(34)</sup>。

以上のように、内因と外因が影響しあい、それによって雑賀衆傭兵は止まることなく目覚ましい成長を遂げた。

(32) 播磨良紀 (2003) 「雑賀惣国と織豊政権の戦い—雑賀惣国の集結を中心に」『和歌山地方史研究』第四十六号

(33) 太田宏一 (1999) 「雑賀渡海衆—石山合戦を中心として」『和歌山市立博物館研究紀要』第十四号

(34) 太田宏一 (2002) 「雑賀衆と鉄砲」『和歌山地方史研究』第四十二号

### 3. 雑賀衆傭兵が参与した主要な紛争

雑賀衆の傭兵活動に関する最初の記録を残したのは実従の『私心記』である。1535年6月17日条に「雑賀衆計300」が大阪に応援しにきたと記された<sup>(35)</sup>。今回の出張作戦でどの紛争に参加したのはわからないが、時期的におそらく細川晴元と三好元長の争いと関係があると考えられる。

雑賀衆が参与した主要な戦争のうち、明確な記録が残されているものは以下の通りである。

時期	紛争者	雇い主	史料
1536年	本願寺VS細川晴本	本願寺	本願寺文書(証如の感状)
1570~1580年	石山合戦 <sup>(36)</sup>	両方	信長公記 ルイス・フロイス日本史 本願寺文書など
1581年	十河存宝VS長宗我部元親	十河存宝	昔阿波物語 三好記
1582年	織田信孝VS長宗我部元親	両方	神宮文庫文書 元親記
1584年	小牧・長久手の戦い	徳川家康	宇野主水日記 イエズス会日本年報など
1585年	豊臣秀吉の紀州攻め	両方	小早川家文書 豊鑑など

一覧表はただ雑賀衆傭兵が一集団として参加した戦争を列挙したに過ぎず、ここは含まれていない作戦行動もたくさんある。例えば、応仁の乱の後に、雑賀衆のうち、いくつかの小隊が畠山に雇われ近畿地域の各戦場で活躍した。<sup>(37)</sup>それ以外にも、史料に記されていない雑賀衆の傭兵活動も数少なく存在するはずである。傭兵隊長を中心に集まった小隊が参加する紛争の数は途方もなく多いので、紹介しきれない。

一覧表から雑賀衆傭兵、ひいてすべての傭兵が持ついくつかの特徴を捉えることができる。

(35) 改訂檀原市史編纂委員会編(1986)『私心記』『檀原市史』Vol.史料2

(36) 石山合戦は大ざっぱな呼称であり、10年にわたる戦いの中に幾つの停戦と数えきれない小規模戦争が含まれていた。ここで一応通説に従え、石山合戦と呼ぶが、あとにもっと詳しい説明を加える。

(37) 鈴木真哉『戦国鉄砲・傭兵隊』75-91頁

まず、一覧表の第一列をみればわかるように、雑賀衆傭兵が武装紛争に参加する頻度はきわめて高い。一覧表にあげたのは明確な証左が取れる主要な紛争であり、雑賀衆が参加するすべての紛争ではない。それにもかかわらず、1570年から1585年までの15年間、雑賀衆はほぼ毎年大きな戦争に参加し、しかも参戦の範囲はその行動能力のリミットにまで達した。この時期を雑賀衆の傭兵活動の全盛期と見なしても大過はない。この時期、地方規模の争覇戦は終わりを告げ、各地域の優勝者は都を目指し、上洛を遂げようとうごめき、近畿地域の戦いはピーク期に入った。雑賀衆の全盛期と近畿衝突のピーク期の重なり具合から見ればわかるように、いわゆる群雄割拠の状態は傭兵を育てる一番よい温床である。持続的な紛争は傭兵が一番ほしがる環境である。

次に、一覧表の第三列を見ると、雑賀衆の雇い主は不多特定多数であり、前の敵は次の雇い主になることもあるし、前の雇い主が何年後かに敵となったこともしばしばあることが伺える。細川晴元と三好元長の紛争において雑賀衆は本願寺の斡旋によって細川側についた。しかし、細川が勝った後、本願勢力の成長を恐れ、それを攻めた。この時、雑賀衆は本願寺に加担し、細川と一戦を交えた<sup>(38)</sup>。後ほど、雑賀衆は前の敵である三好勢の十河存宝と契約を交わし、彼のために戦った<sup>(39)</sup>。戦国中期に入ると、この現象はますます顕著になった。1581年に雑賀衆は織田方についたが、1582年に織田の敵である長宗我部と長期契約を結んだ<sup>(40)</sup>。この現象を理解するのはさほど難しくない。現代の販売業において、豊富な宣伝手段が用いられている。しかし、戦国時代の傭兵の自己PRの手段はごく限られて、手段は二種類しかなかった。一つは直接的な宣伝、すなわち戦闘の際に自分の武勇と作戦技術を「観客」に示し、観客に認められることである。もう一つは口コミあるいは口碑に頼って、雇い主の評判によって名声を挙げることである。感状は一つの媒体である。直接的な宣伝において、「観客」は交戦両方をさすので、優れた戦闘能力は雇い主の感状を得られるだけでなく、相手にも敬意を感じさせる。そして、敬意から「雇いたい」という欲望が生じ、この欲望が遠くないうちに現実的な雇用関係と結びつく。ゆえに、雑賀衆と対抗した大名は戦

---

(38) 鈴木真哉『戦国鉄砲・傭兵隊』76頁

(39) 同上書97-103

(40) 太田宏一(1999)「雑賀渡海衆—石山合戦を中心として」『和歌山市立博物館研究紀要』第十四号

後すぐ雑賀衆を雇い、自分の陣営に引き込もうとした。それに対して、雑賀衆も日和見主義を徹し、頻繁的に雇い主を変更してきた。

そして、一回の紛争において、雑賀衆は同時に両方に加担することがかなり多い。一覧表にあげた半分の戦争において雑賀衆は両方の味方となった。しかも、豊臣秀吉の紀州攻めの目的は雑賀衆を減ぼすことであるにも関わらず、雑賀衆の一部である岡衆が秀吉について、同郷である湊衆を襲った。傭兵にしても、このような行為はさすがが多く見られない。忠義というものを知らずとさんざん言われたランツクネヒトもそれほど頻繁に両方に加担したことはなかった。確かに、中世において、同じ氏族の者は戦争の中で両方について戦うことはさほど珍しいものではなかった。1156年保元の乱において、平家の棟梁平清盛は後白河院に加担するのに対して、叔父である平忠正は院の敵である藤原頼長のほうに付いた。同じように、源氏の棟梁源為義が藤原頼長に付いたが、その子源義朝が後白河院に加担した<sup>(41)</sup>。通説によれば、源氏と平家の目的はどっちが勝ったとしても自分の一族が勝者として存続できることである。しかし、雑賀衆はその状況とまったく無関係である。雑賀衆はただの地域連合であり、各地域において「名家」はあるが、決して平家と源氏のように血脈を保つために両方に加担したわけではない。筆者は、雑賀衆がランツクネヒトよりも緩やかな傭兵集団であることを証明した。共同の利益を目の前にした時に、確かに一定的な結束力があるが、もしもおいしい契約が持ち込まれたら、各傭兵隊長は自分の団体の利益を第一に考え、雑賀衆全体の利益は二の次となる。加えて雑賀衆の勇名は全国に馳せて、自分の敵が雑賀衆を雇ったと聞いたら、自分も雑賀衆を雇い、相手の優勢を打ち消そうとするのは自然な流れである。もし雑賀衆の中に全般的なリーダーが存在すれば、おそらく大規模の同士討ちは組織の判断で防げるはずである。しかし、そのようなリーダーが存在せず、「湯河の起請文」が示したように隊長は独自の判断で契約を受けることが許され、同時にそれぞれの雇い主について参戦することが可能である。ゆえに一覧表に見えるように雑賀衆同士の殺し合いが頻繁に発生した。この状況は雑賀衆の独特な組織構造と自治伝統がもたらしたものであり、傭兵業界においてもかなり異類である。

最後に、雑賀衆と契約を結んだ雇い主たちの特徴について調べてみよう。雑賀

(41) 平信範「兵範記」『京都大学史料叢書』(思文閣)7月10日条

衆の雇い主の共通性は極めて少ない。軍力から見れば、天下人になりかけた織田信長もいるし、石山に囲まれて自己保全しか考えられない本願寺もいる。経済力から見れば、四国を統べる大金持ちの長宗我部家もいるし、一部将であり、出せる金も少ない十河存宝もいる。雑賀衆に対する態度から見れば、雑賀衆を減ぼし、戦争の火種を絶えさせようとする豊臣秀吉もいるし、一時的とはいえ、雑賀衆と連携関係を結ぼうとする徳川家康もいる。宗教面から見れば、「第六天魔王」と呼ばれる仏教の敵である織田信長もいるし、浄土真宗の中枢である本願寺もいる。つまるところ、雑賀衆の雇い主はまさに千差万別、政治的立場、軍事力、経済力、宗教に向ける態度などの方面において共通性がほぼ見当たらない。しかし、このような雇い主たちは奇しくも同じく雑賀衆を選んだ。雑賀衆の勇名が雇い主を引き寄せる要因であることは改めて言うまでもないが、ここで傭兵のもう一つの優勢が大いに働いた。その優位とは兵を養い、そして訓練を施すよりも、兵を雇うことがはるかに安価であることである。自前の武器と食料を持って参戦する無限的な義務兵を除けば、兵士の訓練、装備と糧秣の調達には莫大な資金がかかる。土地（知行）などの高価な資本によって維持された封建的な有限的な義務兵というまでもなく、普段安いと思われがちの奴隷兵ですら装備、食、宿、訓練費用を要する。軍隊を持つ者にとって、戦前において、いつも兵力不足を心配し、勝てそうにないことを悩み、戦いが終わり、すぐに戦争がやって来ないと判断したら、たちまち膨大な兵員による財政の緊迫を忌み嫌い、早く兵士を帰還させようとする。このような欲求は日本においてもヨーロッパにおいてもごく普通である。傭兵は見事にこの欲求を答えた。契約は戦争の直前に結ぶもので、平時の出費を最大限に抑えることが可能である。しかも、自分の知名度、そしてなによりも自分の命を守るために傭兵は自主的に軍事訓練を行うのが普通である<sup>(42)</sup>。雇い主は、訓練費と訓練がかかる時間をたやすく節約できる。そして戦後、確かに傭兵と提携関係を保つ必要があるが、契約関係は存在せず、お金がかからない。雇い主にとって、傭兵は「呼べば現われ、用が済んだら消えてゆく」ような理想的な兵士である<sup>(43)</sup>。傭兵に支払う金は一見高いが、訓練、装備、戦死手当な

(42) ラインハルト バウマン（著）菊池良生（翻訳）『ドイツ傭兵（ランツクネヒト）の文化史—中世末期のサブカルチャー／非国家組織の生態誌』新評論 2002年136-8頁

(43) マキャヴェッリから見れば、傭兵は確かに呼べばあらわれるけど、用が済んでも消えてくれない厄介なものである。ないし、雇い主が傭兵を招いたらもう二度と彼らから逃れない。イタリアにおいて、傭兵隊長は都市の統治権を奪ったこともあっちこっち存在する。雑賀

どの出費をあわせて考えれば、傭兵を雇うことは一回に限ったごく経済的な投資である。しかも、軍事力、経済力、政治立場、宗教傾向を問わず、金さえ払えば、すぐに相当な戦闘力を持つ援軍を得られる。傭兵サービスの潜在顧客は極めて広い。これが雑賀衆の雇い主が千差万別である原因である。良質の傭兵サービスを提供する人がいるから、石山本願寺が常備軍(僧兵)を持たなくとも織田信長と互角に対抗する勇気を得たのではないだろうか。

#### 4. 雑賀衆傭兵の滅亡

雑賀衆を使って作戦を行った後に、すぐさま雑賀衆の危険性を感じ、雑賀衆に対し武力討伐を行使した雇い主もたくさん存在する。傭兵史学者の菊池良夫のいうように、傭兵というものは、戦功を立てば猜疑され、無能であれば捨てられ、傭兵の歴史はまさに哀史というべきものである<sup>(44)</sup>。具体的に、細川晴本と一緒に三好氏を倒した後に、細川の本願寺攻めはただの雑賀衆に対する間接攻撃であるとするならば、織田信長、豊臣秀吉が雑賀衆の力を借りて戦略的優位を取得した後すぐに紀州攻めに転じたのは間違いなく雑賀衆の危険性を念じ、危険を未然に防ごうとする行為である。そういう状況を誘致したのは当然雑賀衆の高い戦闘力、特に雑賀衆が持つ大量の鉄砲に危険を感じたためである。しかし、筆者から見れば、雇い主にとって、雑賀衆が危険すぎて放置できない原因は他にもある。その原因は傭兵の特質とつながっている。

その特質の一つは、傭兵が一人の主人に忠誠を誓わず、戦場において誰に加担するのは未知数であることである。雇い主にとって、この特質は諸刃の剣である。自分を窮地から救うこともできるけれど、敵の助けになることもありうる。賢い雇い主は平時においても傭兵と良い関係を維持するべきとはいえ、契約関係が存在しない限り、傭兵がほかの作戦契約を請負うことに異論を唱える義理はないし、不可能である。ほかの雇い主が将来の敵になるのは乱世の日常茶飯事である。明日の悩みを根絶するため、細川も織田も優勢を取った後すぐに雑賀衆に攻

---

衆にしてはこういう一面はあまり現れていなかったし、イタリア以外の地域にも見たことはなかった。そこでマキャヴェッリが述べた状況はイタリア都市の常備軍力が弱いゆえにもたらした結果であり、傭兵の特性によるものではない。海軍史家Theodore Roppもマキャヴェッリの傭兵に対する偏見を何度も指摘したことがあった。

(44) 菊池良生『傭兵の二千年史』189-205頁

撃を仕掛け、その実力を削ごうとした。具体的に、雑賀衆が1535年に細川晴元に協力したが、1536年に細川の攻撃をこうむった<sup>(45)</sup>。1577年初ころに織田信長と手を組んだが、2月に入るとすぐ織田軍に攻められた<sup>(46)</sup>。雇い主から敵に変わる猶予時間はきわめて短い。おそらく、雇い主たちはこう考えた。粉骨砕身で作戦に取り込んだ雑賀衆傭兵は当然のごとく人員的な死傷を出し、蓄積した兵糧、弾薬などの戦略物質もかなり消耗したはずである。ゆえに雑賀衆傭兵にとって戦闘契約が終わったばかりの時期は一番脆い時期である。この時期に雑賀衆を攻撃するのは自分の軍勢の死傷をなるべく抑えられるばかりではなく、雑賀衆にもっとも有効にダメージを与え、短期間のうち再起不能させ、ほかの勢力に協力できないようにさせられる。織田信長は雑賀を制圧した後に、各傭兵隊長に忠誠を誓う文書を書かせ<sup>(47)</sup>、雑賀衆傭兵の使用権を独占しようとする意欲が伺える。

しかし、豊臣秀吉の紀州攻めは細川や信長らと全然違う目的を抱いた。秀吉の紀州攻めは細川、織田のように雑賀衆を使った後すぐに攻撃を仕掛けたわけでもなく、雑賀衆の力を削ぎ、別の勢力に協力できないようにしようとしたわけではなかった。豊臣政権の「刀狩」と「兵農分離」政策から見れば、秀吉が目論んだことはおそらく雑賀衆傭兵という地方勢力の根絶、雑賀傭兵の帰農、ひいては全国の傭兵稼業の根絶である。秀吉のこの政策を招いたのは傭兵のもう一つの特徴である。すなわち、「傭兵は強力な統一政権を忌み嫌い、集中した権力が各地域に安定をもたらし、紛争を減少させることを怖がる」という特徴である。

この特徴は強い自治伝統を保ってきた雑賀衆において、もっとも鮮明に現れた。戦乱は傭兵の糧であり、良し悪し関わらず、強い統一的な権力は間違いなく武装衝突の頻度と独立勢力の数を減らしていく。傭兵の生業にとって致命的であることこの上ない。露呈しつつ統一的権力に対して、傭兵が取る対策は大体二種類がある。一つは頻繁的に雇い主を変え、交替あるいは同時に両方に加担し、戦略上のバランスを維持しつつ、一方で強大化を阻止し、それによって地域統一を阻むことである。マキャヴェッリ時代のイタリア傭兵は常にこういう細工を繰り返していた<sup>(48)</sup>。もう一つはすでに天下人に足りる実力を持った相手に対して、傭

(45) 塙保己一集(1988)「細川両家記」『群書類従』(温故學會)第380合戦部12

(46) 『信長公記』町田本 <http://www.page.sannet.ne.jp/gutoku2/kouki.html> 2013.1.29

(47) 同上書。サインをしたのは主に地域の実権者であり、なかんずく傭兵隊長もある。

(48) Machiavelli, *The Prince*, pp39-56

兵は全力で天下人の敵と協力し、天下統一の実現に最期まで立ちはだかる。

以上の二種類の方法は、雑賀衆が全て使ったものである。一覧表にも見えるように、雑賀衆は常に紛争両方の陣営に飛び回っていた。特に四国の戦争において、雑賀衆は1581年に織田家に協力したが、1582年に敵である長宗我部家に加担するようになった<sup>(49)</sup>。のち、得意の両方加担もしばしば見せた。これは第一種類に属するものである。しかし、本願寺に加担して信長と争い<sup>(50)</sup>、徳川家康と協力して豊臣秀吉に逆らい、豊臣秀頼と組んで徳川家康と戦うことはどう考えてもおかしい。鈴木真哉の話では雑賀衆はいつも「天下人に逆らう」という<sup>(51)</sup>。国家統一を尊ぶ史観のもとに、雑賀衆はまさに歴史の流れに逆らい、統一を阻む悪者の集団である。しかし、雑賀衆にとって、これはただ傭兵として自分の存在を守るためのことをしたまでである。これは第二種類の方法である。豊臣の天下統一にとって、雑賀衆傭兵は単なる敵の「潜在」な盟友ではなく、もっと積極的、直接的そして持続的な「統一の妨害」を目的としたテロリスト集団である。そもそも、傭兵産業は本質的に統一政権と相容れない存在であり、天下人にとって傭兵産業そのものが根から排除しないといけないものである。ゆえに豊臣秀吉の紀州征伐は織田信長のそれとはまったく異質なものである。しかし、豊臣秀吉が排除しようとしたものはあくまでも天下統一を阻む「傭兵集団」としての雑賀衆であり、天下を統一できるような力を手に入れる前に、秀吉も傭兵隊長にかなりな好意を持ち、雑賀衆を雇用することもかなり頻繁である。佐武伊賀守の働書によると、秀吉はもし佐武が十分な鉄砲(兵)を揃えたら知行を賜ってあげてもよいと言った<sup>(52)</sup>。

傭兵の最大の脅威はマキャヴェッリの言う怠慢、八百長戦争あるいは雇い主の財布ばかり狙うことではなく、地域統一の実現を阻むことである。

---

(49) 参考『信長公記』町田本 <http://www.page.sannet.ne.jp/gutoku2/kouki.html> 2013.1.29 & 「鷺森別院文书」

(50) 織田信長の状況はちょっと微妙である。織田家の実力は確かに強いのであるが、天下統一できるかどうかまだ定かではない。ゆえに雑賀衆は豊臣秀吉に反抗するように織田信長に逆らうことはなく、ときどき協力すらしめた。織田信長の紀州攻めも雑賀衆をけん制する意味が濃いので、秀吉のように雑賀衆傭兵の基礎を減ぼそうとはしなかった。

(51) 鈴木真哉『戦国鉄砲・傭兵隊』211-218頁

(52) 「佐武伊賀働書」、参考転引自武内雅人(2011)「史料解題の改訂および補遺紀州経済史文化史研究所紀要」『紀州経済史文化史研究所紀要』第32号。注意すべきところは元和五年浅野家転封したときの侍帳の中に「五百石 佐武伊賀」という条目があって、佐武伊賀守はたしかに知行を受けたことを証左した。

しかし、雑賀衆傭兵は裕福な契約を捨てて、最期まで天下人と対抗し、統一コースを阻もうとする孤高な戦いを続けたが、結果的に雑賀衆は傭兵稼業の基盤をも、学者の言う「大いなる共和国」をも守りきれず、豊臣秀吉の紀州攻めののち、兵農分離、太閤検地が相次いで行われ、ある者は武器を捨てて農民になり、ある者は流浪して他国の鉄砲師範になり<sup>(53)</sup>、傭兵集団としての雑賀衆は最終的に日本の統一を阻止できなかった。豊臣秀吉の死亡と徳川家康にまつわる紛争のおかげで、傭兵再興の曙がかすかに見えるときに、しぶとく生き延びた雑賀衆と全国の傭兵(浪人)は大阪城に集まり、昔の雇い主であり、今日の天下人である徳川家康に二番勝負を挑んだが、組織作戦の協同性と鉄砲集団の優勢を失った雑賀衆傭兵はもはや普通の野武士と変わりなく<sup>(54)</sup>、大阪夏の陣で苦杯をなめさせられた。徳川幕府の二百年の平和が始まり、この時期の傭兵活動は用心棒にとどまり、大規模の作戦に適する雑賀衆傭兵は徹底的に市場を失い、歴史の表舞台から消え去り、幕末、明治ごろになるまで生き返る様相を呈しなかった。

## 結び

傭兵は世論からきつく批判され、罵声とともに何千年の歳月を過ごした。生産様式、社会制度がどう変わろうが、傭兵は依然として紛争地域で活躍している。マキャヴェッリの「君主論」の教えも国連法令の禁止もむなしく、傭兵はいつもゴーストのように戦場をさまよひ、金を出してくれる人にサービスを売り込む。中世および近世の日本において、雑賀衆はこのような傭兵の典型である。彼らは傭兵としての共通性を備えつつも日本の独特な政治情勢と自身の組織の特徴によって、独自性を持っている。雑賀衆の組織構成、戦場表現などの要素を分析することによって、日本の傭兵だけではなく、もっと広範的な傭兵像および傭兵の扱い方を探るのが拙稿の目的である。

---

(53) 播磨良紀(2003)「雑賀惣国と織豊政権の戦い—雑賀惣国の集結を中心に」『和歌山地方史研究』第四十六号

(54) 鈴木貞哉(2004)『戦国鉄砲・傭兵隊』211-218頁